

「サッカー小僧指導者の部屋」

私の指導者論

Mi teoría como entrenador

取材・文・写真=小澤一郎

第6回

末本亮太
(NPO大豆戸FC)S場合

「サッカー小僧指導者の部屋」は、これまで兄弟誌「中学サッカー小僧」において連載してきたページです。「強いチームを目指す指導者のためのページ」というコンセプトはそのままに、加えて育成に興味のある読者にも読んでもらえるようスペインでの指導者経験もある筆者が、日本の育成年代の指導者を中心に訪ね、彼らが培ってきた指導論を語ってもらいます。



「指導」と「任せる」部分のバランス

今年2月に行われた神奈川県少年サッカー選手権高学年の部で街クラブとしては唯一のベスト4入りを果たしたNPO大豆戸フットボールクラブ(以下、大豆戸FC)に注目している若手指導者がいる。彼の名は、末本亮太。小学5、6年にあたるLクラスを担当する末本氏は、横浜市港北区大豆戸を拠点に現在キッズからシニアまで約400名が活動している大豆戸F

Cの指導理念である「一人ひとりが主役になれる場所」、「いつでもどこでも誰とでもできる選手」をポトムアップ理論によって実現しつつある。末本氏が4年前から導入している同理論は、広島観音高校を全国の強豪校に押し上げた畑喜美夫氏(現安芸南高校サッカー部監督)が提唱し、練習メニューから戦術、スタメンに至るまで全てを選手に任せる指導法だ。

とはいえ、ポトムアップ理論自体が注目されると同時にある種の流行りとなつてきている今、前提とし

て抑えておきたいことは「選手に任せる」ことで全てが上手くいくことも、魔法の指導理論もないということ。大切なことは、最終的に選手に任せることのできるまでのプロセスであり、「何をどこからどのように任せるのか」という指導と任せる部分のバランス。だからこそ、末本氏のような指導者を取り上げる場合は、今実践している指導論の話やチームの結果以上に、試行錯誤の時期や失敗談についての話を聞いておくことが重要となる。7年前に大豆戸FCの

コーチに就いた末本氏自身、いまだ日本の育成現場に多い「指導者の仕事は教えること」、「自分が教えれば上手くなる」と考えるタイプの指導者だったという。指導への情熱や熱血指導を武器に、大豆戸FCのコーチに就任した直後から担当チームはメキメキと強くなり、県予選のベスト16あたりまでは行けるようになった。しかし、ベスト8やそれ以上の壁は厚く、ある時期からは途端に結果が伸び悩むようになる。当然、末本氏は「自分がしっかりと教えられてい

ないから勝てない」と考え、更に「教える」指導に力を入れていくわけだが、同時並行で「自分だけの枠組みで押し付けていることは本当に正しいのか?」と自問するようにもなった。

サッカー以外の活動を通して選手間のコミュニケーションを生む

前向きな意味で「常識を疑う」姿勢を心がけ、教え込む指導法が壁にぶつかった時に普段とは違う視点、角度からのアプローチで自

問できた最大の理由は、末本氏の異色のキャリアにあった。早稲田大学を卒業後、一般企業に就職した末本氏は、短期間で人材育成マネージャーというポジションに昇格。しかし、「人を育てる、人を大切にする」企業理念に反するようである決定にどうしても納得がいかず退職を決定。3年間の社会人経験を経たそのタイミングで誘いを受けたのが大豆戸FCのコーチ業だった。元来、「自分のいる場所とは異なる世界、ゾーンに行くこと、新しい人たちと出会うこ

と」を意識した生活を送り、読書や異業種の人間との交流に積極的だった末本氏は、指導者となつて以降もクラブ内部や育成現場に留まることなく、オープンマインドを持つ積極的に関わり、指導者として人としての力と魅力が磨いていった。成長のために自身が吸収し、変化していくことを厭わない末本氏だからこそ、指導者としての自信や信念が揺らぐ時期にはこんな事件をプラスに変えた。

3年間中学生を指導した後、小学4年生を担当することになった末本氏がいつもの練習で指導していると、ある選手から「コーチ、偉そう」と言われた。般に閉じこもるような指導者であれば、スマイルの指導者であれば、その発言をした選手に「生意気なことを言うな」という態度で押さえ込めばいいはずだが、末本氏はその一言にハッとさせられ、深く自省する。小さな出来事ではあるが、その一言を自らの指導者としての殻を破るチャンスに変えた末本氏は、それ以降上から目線の指導や答えを与え、教え込む「ティーチング」を止め、発問によって選手

の考えや創造性を引き出す「コーチング」を指導の軸に据えていく。そうした指導方針の転換当初に末本氏が取り組んだことが、サッカー以外のアクティビティだ。「パランスは悪かった」と当時は振り返って苦笑いする末本氏が、宝物探しや野外活動など、サッカー以外の活動を通して、「子どもたちの内面にある強さを引き出しにかかった」のだという。実際、それは良い効果を生み出し、選手間には良い関係とコミュニケーションが見え始め、自然と選手同士がピッチ内外でチームやサッカーについての会話を議論をするようになった。また、選手の内面にある引き出しの数を増やすべく、ピッチ内外で選手に様々な刺激や考えるきっかけを与えていった。

例えば、取材時には練習終了後に選手を集め、「みんな」って何?、「この言葉はどういう意味?」という学校の授業で使うようなプリントを配布しながら、チーム全員で言葉の定義について議論していた。指導者が何らヒントや材料を与えることなく突如選手に「考える」、「自分で判断しろ」と言っても難しいように、選手に



末本亮太

Ryota Suemoto

1978年4月生まれ。神奈川県出身。横浜翠嵐高校、早稲田大学卒。大学在籍中からプレイヤーと並行して母校のコーチや大豆戸FCのコーチを務める。大学卒業後に一般企業に就職。企業においては、アルバイトと新入社員に対する人材育成が評価される。3年の社会人生活を経て、NPO大豆戸FCに転職。ジュニアユースやシニアチーム、フットサルチームを立ち上げ、一人一人が主役である世代の人たちがサッカーを楽しめる環境を提供するために力を注いでいる。現在はジュニアチーム(U12)のメインコーチを務めている。